

大学教育学会第30回大会@目白大学  
2008年6月8日

## 大学生の学習成果(ラーニング・アウトカム)(1): その構造と正課・正課外の差異

山田剛史・森 朋子  
(島根大学教育開発センター)

### 問題の所在

- 高等教育のグローバル化・ユニバーサル化
- 社会的圧力/説明責任(アカウンタビリティ)
- 国立大学法人化/外部評価(認証・法人評価)
- 競争原理(GPなど)
- 学部教育→学士課程教育(学士学位の持つ意味再考)
- 中教審「学士課程教育の構築」
- FDの法制化(義務化)
- 大学教育の質保証/出口管理**

### 卒業生調査に着目

- 視点(構成)の転換

	大学(教育)	学生(学び)
従来型(上)	◎	△
本調査(下)	○	◎

学生は、自己と切り離された形で大学(教育)を評価するのではなく、自身が大学(教育)を通じて何を身につけたのかといった自己(学び)と大学(教育)とを結びつけた形で評価するといった視点に立って調査デザインを行った。

### 調査の概要

(1) 調査対象者・実施方法  
国立S大学の2008年3月に卒業する学生1144名に配付し、回収された657名(回収率57.4%)が対象。

法文	教育	医	総合理工	生物資源科	合計
140名(21.3%)	124名(18.9%)	35名(5.3%)	187名(28.5%)	171名(26.0%)	657名(100.0%)

(2) 調査時期  
2008年2月中旬～3月末日

(3) 調査内容

- 卒業後の進路、就職先の職種といった就業に関わる項目(2項目)
- 在学時の成績に関する項目(1項目)
- 在学中の正課・正課外活動へのコミットメントとその有意度に関する項目(3項目)**
- 在学中の自己形成的態度に関する項目(2項目)
- 大学教育、学習・生活支援に関する満足度に関する項目(11項目)
- 教育体系全体、教養教育、専門教育それぞれの改善要求度に関する項目(14項目)
- 大学満足度に関する項目(1項目)
- 学習成果(ラーニング・アウトカム)に関する項目(40項目)**

各項目に対して、a.授業全体(予習復習を含む)、b.授業以外での活動(部活やバイト、友人関係等)それぞれを通じてどの程度身についたかといった観点から問うている(4件法)。

### 大学生の学習成果(ラーニング・アウトカム)尺度の構造分析

- これまでに提起されている様々な学習成果指標(「学士力(中教審, 2007)」「社会人基礎力(経済産業省)」「キーコンピテンシー(OECD)」「秦代表科研調査(2007)」「初年次教育調査(山田, 2007)」, 各大学の卒業生調査等の項目)を元に吟味・精選し、最終的に40項目の学習成果(ラーニング・アウトカム)項目群を作成後「卒業生調査(山田, 2008)」で実施した。
- 因子分析(主因子法, promax回転)を重ね、最終的に**35項目8因子**に収束  
⇒発表要旨集録参照
- 信頼性係数(α)は.**0.772～0.918**と高い信頼性
- 各因子得点間の相関係数(r)は(1つを除き).**0.26～0.68**(いずれも1%水準で有意)

### 結果①: 正課と正課外の差異(t検定)

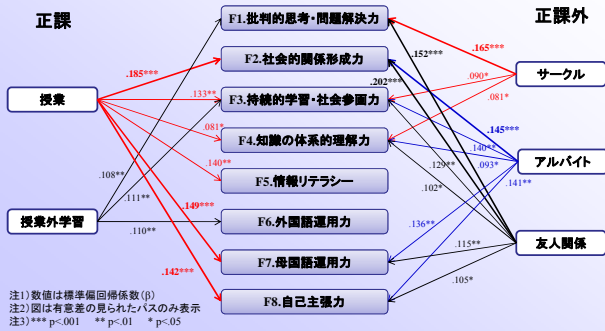
- 問い: 正課活動と正課外活動とで、得られるラーニング・アウトカムにはどのような違いが見られるのか?

因子	得点範囲	正課	正課外	t値
F1.批判的思考・問題解決力	6-24	17.23(3.2)	-	17.14(3.7) 0.70
F2.社会的関係形成力	6-24	18.24(3.8)	<	<b>19.32(3.3)</b> -7.50**
F3.持続的学習・社会参画力	6-24	17.57(3.3)	<	<b>18.05(3.4)</b> -4.06**
F4.知識の体系的理解力	5-20	13.46(2.5)	<	<b>13.67(2.7)</b> -2.03*
F5.情報リテラシー	4-16	<b>12.41(2.1)</b>	>	10.61(2.7) 15.24**
F6.外国語運用力	2-8	<b>4.67(1.6)</b>	>	4.01(1.7) 10.18**
F7.母国語運用力	2-8	5.68(1.2)	-	5.59(1.3) 1.73
F8.自己主張力	4-16	10.88(2.3)	<	<b>11.46(2.4)</b> -6.64**

\*\* p<0.01 \* p<0.05 数値は平均値(カッコは標準偏差)

結果②：正課と正課外の差異(重回帰分析, ステップワイズ法)

- 問い:より具体的な正課・正課外活動において、ラーニング・アウトカムに及ぼす効果(影響)はどのようなものか?



考察

- 結果①より、正課と正課外では、身につけやすい能力に差異がみられる(絶対値にも留意)。いたずらに一般的に求められているものを全て正課で実現させようというのではなく、正課外の持つ教育的効果にも配慮しながら、トータルに実現できる学習環境(ハード面・ソフト面)を整備することが求められる。
- 結果②より、とりわけ正課の授業と正課外の友人関係が、より多くのアウトカムに影響を及ぼしていたことから、(1)両者の性質を併せ持ったような授業デザイン(ラーニング・コミュニティの形成を意識したりアクティブ・ラーニング形態を導入したり)が有効であること、(2)アルバイト活動も多くのアウトカム指標にポジティブな影響を及ぼしていることから、インターンシップなどより就業体験に近い教育プログラムを導入していくことも有効であること、などが示唆された。
- いずれも、効果が弱いから必要ない、という話ではなく、相補的に全ての要素を高めていくことが求められることは言うまでもない。